

## 油症と妊娠異常について

### ダイオキシン類は妊娠にどのような影響を及ぼすのでしょうか？

動物実験では、妊娠中にダイオキシン類を投与すると流産、死産、新生仔の体重減少をきたすことが報告されています。ダイオキシン類は妊娠の維持に欠かせない女性ホルモンのエストロゲンの働きに拮抗する作用があること、また子宮筋の収縮を起こすプロスタグランジンという生理活性物質の発現量を増やすことが分かっています。これらが流産や死産の要因ではないかと考えられています。

ヒトがダイオキシン類にばく露した例は、カネミ油症、台湾油症とイタリアのセブソ事故が世界で最も知られています。台湾油症では、自然流産や死産の割合が正常より高いことが報告されています。一方、イタリアのセブソ事故では、自然流産や死産の割合は正常と変わらないとされています。このようにヒトではダイオキシン類の妊娠に及ぼす影響は定まっていません。

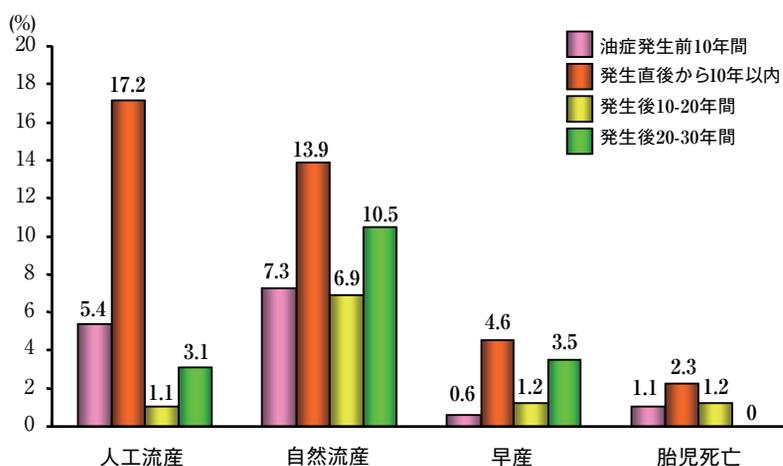
### 油症における妊娠異常について調査しました

2004年に、油症患者さんの妊娠経験者602人に聞き取り調査し、回答のあった214人（512妊娠）について分析しました。妊娠した時期が①1968年の油症発生前10年以内②発生直後から10年以内③発生後10-20年間④発生後20-30年間という4つの期間に分類して妊娠の異常（人工流産、自然流産、早産、死産）の割合を調べました。

それによると、発生が公になった直後から10年以内に妊娠した場合は、発生前と比較すると早産は5.7倍、自然流産は2.09倍、また自然流産と死産を合わせた胎児死亡は2.11倍も起こりやすいことが分かりました。一方、発生から10年以上経った場合には、発生前と比べて大きな差はありま

せんでした。また、ダイオキシン濃度が10倍になると自然流産、早産、胎児死亡の割合が増えることが分かりました。これらの結果から、高濃度のダイオキシン類ばく露では流産、早産、胎児死亡といった妊娠異常をきたすと考えられました。

妊娠時期別にみた妊娠異常の発症率



### 現在、PCBやダイオキシン類の子どもの健康に対する影響について調査しています

九州大学では、環境省事業「子どもの健康と環境に関する全国調査」に協力しています。この調査は、妊娠中にお母さんの血液や臍帯（へそのお）とその血液、胎盤などを提供していただき、PCBやダイオキシン濃度を測定します。さらに子どもの健康状態を出生から12歳に亘るまで観察することによって、PCBやダイオキシンの子どもに対する影響について検討するものです。PCBやダイオキシンの子どもに対する影響についての貴重な知見が得られる可能性があります。調査にご協力いただける方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。

問い合わせ先：九州大学病院 産科婦人科

月森 清巳（現所属：福岡市立こども病院・感染症センター）

諸隈 誠一（子どもの健康と環境に関する全国調査事務局担当）

〒812-8582 福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学病院産科婦人科

TEL 092-642-5395 / FAX 092-642-5414